

さむい冬が、北方から、きつねの親子のすんでいる森へもやってきました。

・とうとうその辺りへも冬がきた。強調、

ある朝、ほらあなから、子どものきつねが外に出よう  
としましたが、

「あつ

とさけんで、目をおさえながら、母さんぎつねの所へ  
げてきました。

「母ちゃん、目に何かささった。ぬいてちょうだい。早  
く、早く。」  
と言いました。

母さんぎつねがびっくりして、あわてふためきながら、  
・ぼつやが何かの外的に襲われて目を怪我した！

目をおさえている子どもの手を、おそれるおそれる取りのけ  
てみましたが、

・おそれる／＼と見て見られない。取り返しのつかないことになってしま  
った／＼と思ってしまうの目をのぞいてみる。

森へも……森へ 森に との比較

出ようとはしましたが……穴を出る直前

さけぶ……はげしく大声をあげる

転がる……回転しながら進む

◎音読で映像化

びっくり……不意のできごとに驚くさま。

あわてる……(何をしてよいか分らず)うろたえさわぐ。驚いてさわ  
ぎまどう

あわてふためく……うろたえて(不意の出来事に驚きあわてて、まご

おそれるおそれる……こわごわ

おそれ……心配、不安

◎「母さんぎつねは、子どもの手をどんなふうに取りのけたのかな？  
パツと？それともゆっくり？」

何もささってはいませんでした。

・まだ心配は無くなつてはいない。子ぎつねはまだひるえている。  
逆に不安がふくらむ。「いったい何が起きたんだろう」

母さんぎつねは、ほらあなの入り口から外へ出てはじめてわけが分かりました。  
・やごと安心

さく夜のうちに、まつ白な雪が、どっさりふったのです。その雪の上からお日様がきらきらとてらしていたので、雪はまぶしいほど反しやしていたのです。雪を知らなかつた子どもは、きつねは、あまり強い反しやを受けたので、目に何かささつたと思つたのでした。

子どものきつねは、遊びに行きました。まわたのようにやわらかい雪の上をかけ回ると、雪の粉が、しぶきのようにとびちつて、小さいにじがすつとうつるのでした。

・初めて触れる雪の世界。ふわふわと柔らかい感触を楽しんで賣つ白な雪の上をあちこち駆け回る。美しい虹が見える。  
雪遊びに夢中

すると、とつぜん、後ろで、ドタドタ、ザーツと、ものすごい音がして、パン粉のような粉雪が、ふわあつと子ぎつねにおっかぶさつてきました。

・化け物が襲ってきた！  
・夢中で逃げた  
子ぎつねはびっくりして、雪の中に転がるようにして、十メートルも向こうへにげました。

まわた……繭を引きのばして作つたわた。屑繭などから取る。白く光沢があり、やわらかくて軽い。主として防寒用衣類などに用いる。絹綿。

かけまわる……走りまわる。あちこちかけずりまわる。

しぶき……液体が細かく飛び散ること。また、そのしずく。飛沫。

「水―をあげる」

とつぜん……にわかなさま。だしぬけ。不意。突如。

ふわあ……軽やかで柔らかな感触を一瞬の感じとして言う

おっかぶさる……「かぶさる（上におおいかかる。）」を強めていう語。

おおう……露出するところがないように、全体にかぶせてしまう意。

いる……人・動物など動くものが存在する。

なんだろうと思って、ふり返ってみましたが、何もい  
せんでした。それは、もみのえだから、雪がなだれ落ち  
たのでした。まだ、えだとえだの間から、白いきぬ糸の  
ように雪がこぼれていました。

間もなく、ほらあなへ帰ってきた子ぎつねは、  
「お母ちゃん、おててがつかたい、おててがちんちんす  
る。」

・雪の世界で遊ぶ楽しさより先に冷たさががまんできなくなってしまう  
のだらう。「ちんちん」とは、子ぎつねらしい感じ方。痛いほどの  
つめたさ、ちんちん熱をもつほどにははれてしまった手

と言って、ぬれてぼたん色になった両手を、母さんぎつ  
ねの前にさし出しました

。母さんぎつねは、その手に、はあっと息をふきかけて、  
ぬくとい母さんの手で、やんわりつつんでやりながら、

・ぼつやの手の痛みをつつみこむように

「もうすぐ、あたたかくなるよ。雪にさわると、すぐあ  
たたくくなるもんだよ。」

と言いましたが、かわいいぼつやの手にしもやけができ  
てはかわいそうだから、夜になったら、町まで行って、  
ぼつやのおててに合うような毛糸の手ぶくろを買ってや  
ろうと思いました。

もみ……マツ科の常緑針葉樹。高さ三〇メートル内外。灰色、葉は線形  
で密生。初夏、雌雄花を同株に開き、円柱形緑褐色の球果を結ぶ。  
庭木とし、ク  
リスマス・ツリーとする。材は建築材・船材・経木材・製紙原料。  
シラビソ・アオモリトドマツ  
などは同属。もみそ。とうもみ。もむのき。

ちんちん……辞書になし  
じん……しびれるように鋭く強い寒気、痛み  
じんじん……畳み込んでいく状態。「じんじんと骨にしみこむよう  
な寒さ

ぼたん……牡丹色 赤紫  
さしだす……前へ出す。「両手を――す」

しもやけ……強い寒気にあたって局所的に生ずる凍傷(こむぎやけ)。

・赤紫色のぼたん色になった手を見、つつみこんでやったときのぼつやの手のつめたさを自分の手に感じたとき、母としてこのままほっておけない気持ちになった。この時は、(町)でぶくろが打っている所(という意識だけ)でいる。

くらいくらい夜が、ふろしきのようなかげを広げて野原や森をつつみにやってきましたが、雪はあまり白いので、つつんでもつつんでも、白くうかび上がっていました。

・真つ暗な闇の世界。そこからこぼれだす雪明かり

親子の銀ぎつねは、ほらあなから出ました。子どものほうは、お母さんのおなかの下へ入りこんで、そこからまんまるな目をばちばちさせながら、あっちゃこっちゃを見ながら歩いていきました。

・初めて森を出て行く。しかも夜。だが、母ぎつねのおなかの下という安全な場所に入り込んでいるからこわさは無い。むしろ初めて見る世界を好奇心いっぱい、夢中になって眺め回している。まばたきするのもおしいような。目に入るものはすべて見逃すまいという感じ。

やがて、行く手に、ぼつたり明かりが一つ、見え始めました。それを子どもはきつねが見つけて、

あまり……物事が普通(正当)と思われる程度を越えること。過度。法外。あんまり。「一ひどいのであきれた」「たべると腹をこわす」  
うかびあがる……底の方から浮きあがる。

ばちばち……上下のまぶたをあわただしく開けたり閉じたりするようす。「母親は驚きのあまり、目をばちばちさせていた。」

ばちくり……目を大きく動かしたりまばたきしたりするようす。以外なできごとに出合っただけの場合の表現

◎「こぎつねは、今までにも夜に外を出歩いたことあったのかな？」  
◎『目をばちばちさせ』からどんな子ぎつねが見えてきますか？

ぼつり……ほかのものから離れて一つ孤立しているようす

「母ちゃん、お星様は、あんなひくい所にも落ちてるのねえ。」

・冬の星はまはゆいほどの輝きだから、子ぎつねにしてみればお星様に見えるのも無理はない。むじゅきで素直な目。星と同じく美しく清らかな光を放っている町の灯に何かしらい世界を感じる

「あれは、お星様じゃないのよ。」

と言って、そのとき、母さんぎつねの足は、すくんでしまいました。

・子ぎつねと反射に町の灯が恐ろしく不気味な輝きとして目に映る  
「あれは、町の灯なんだよ。」

その町の灯を見たとき、母さんぎつねは、あるとき町へお友だちと出かけて行って、とんだ目にあつたことを思い出しました。

およしなきいって言うのも聞かないで、お友だちのきつねが、ある家のあひるをぬすもうとしたので、おひやくしようさんに見つかってさんぎ追いまくられて、命からがらにげたことでした。

「母ちゃん、何してんの。早く行こうよ。」

と、子どものきつねがおなかの下から言うのですが、母さんぎつねは、どうしても足が進まないのです。

・それまで、ただぼうやにあつたかい手びくろを買ってやりたいという気持ちでいっばいで、町へ手びくろが打っている所、というおまかな意識で

すくむ……(恐れなどのために)身がちちんで動かない。

とんだ……思いがけなく重大な。思いもよらない。たいへんな。とんでもない。

さんぎん……容赦なくはげしいさま。

追いまくる……烈しく追いたてて逃げ走らせる。

からがら……かろうじて(ようやく)。やっと。わずかに。やっと。ようやく。

いた。それが、町の灯という現実に触れた瞬間、自分の体験の中にある具  
体的な町が呼び覚まされる

・ぼつやに手ぶくろを買ってやりたいから何とかして町へ行かねばと思う  
のだが、どつにも恐怖のため体がこわばって進めない。ちょうど深い谷の  
ゆるるつりばしを前にしてすすんでしまつた。

そこで、仕方がないので、ぼつやだけを一人で町まで、  
行かせることになりました。

・成り行き上そうなつてしまった。

母ぎつねがいつまでも動けないままでいるのに対して、子ぎつねはむじや  
きに「早く町へ行こうよ」と、とつと先へ歩き出そうとする。その勢い  
に何となく乗ってしまったという感じ。

「ぼつや、おててをかた方お出し。」

と、母さんぎつねが言いました。その手を、母さんぎつ  
ねはしばらくにぎっている間に、かわいい人間の子どもの  
手にしてしまいました。

ぼつやのきつねは、その手を、広げたり、にぎったり、  
つねつてみたり、かいでみたりしました。

「なんだかへんだな、母ちゃん、これなあに。」

と言つて、雪明かりに、また、その人間の手にかえられ  
てしまった自分の手をしげしげと見つめました。

・見たこともない奇妙な形、動きをする手にとまどっている。もう一つ、な  
ぜ母さんがこんなことをするのかわからないことかひるむとまどいませ。

「それは人間の手よ。いいかいぼつや、町へ行ったらね、  
たくさん人間の家があるからね。まず、表にまるいシヤ

仕方がない……やむを得ない。どうにもならない。  
なる……現象や物ごとが自然に変化していき、そのものの完成され  
た姿をあらわす。

しげしげ……じつと見つめるさま。つくづく。よくよく。  
見つめる……視線をはずさず、その物に見入る。じつと見つづける。  
凝視する。「穴のあくほどーめる」

ツポのかん板のかかっている家をさがすんだよ。それが、見つかったらね、トントンと戸をたたいて、こんばんはって言うんだよ。そうするとね、中から人間が、すこうし戸を開けるからね、その戸のすき間から、こっちの手、ほら、この人間の手をさし入れてね、この手にちようどいい手ぶくろちようどいって言うんだよ。分かったね、決してこっちのおててを出しちやだめよ。」

・母ぎつねは、子ぎつねの手を取って、手に何度もさわりながら、繰り返し繰り返し念を押す。これ以上前に進めない母にできる精一杯のことをしつゝ。

「どうして。」  
と、ぼうやのきつねは聞き返しました。

「人間はね、あい手がきつねだと分かると、手ぶくろを売ってくれないんだよ。それどころか、つかまえておりの中へ入れちやうんだよ。人間って、ほんとにおそろしいものなんだよ。」

「ふうん。」  
「決して、こっちの手を出しちやいけないよ。こっちのほう、ほら、人間の手のほうをさし出すんだよ。」  
と言って、

・何とか人間のおそろしさを分からせて、慎重に、失敗しないようにさせようと言いつける。だが、母親の必死な思いとつらはげに、子ぎつねは母ぎつねの言うことを実感できない。だから一層母ぎつねはくどくと言いつける。

母さんのきつねは、持ってきた二つの白どうかを人間の手のほうへにぎらせてやりました。

決して…… かならず。どうしても。絶対に。

言い聞かせる…… わけを説明して教えさすとす。言つて聞かせる。説さとす…… 言いかせて納得させる

ふうん…… 軽く受け答える  
◎ 「この時のこぎつね、どんな顔がうかぶ？」

子どものきつねは、町の灯を目当てに、雪明かりの野原をよちよちやっついていきました。

・たどたどしい足どり。それを見送る母ぎつねは、不安と後悔が一拳に膨らむ思いだったろう。

はじめのうちは一つきりだった灯が、二つになり、三つになり、はては、十にもふえました。きつねの子どもはそれを見て、灯には、星と同じように、赤いのや、黄色いのや、青いのがあるんだなと思いました。

・やはり、星と町の灯を同じイメージで見ているきつね

やがて町に入りましたが、通りの家々はもうみんな戸をしめてしまつて、高いまどからあたたかそうな光が、道の雪の上に落ちているばかりでした。

・あたたかな光のこぼれる人間の世界は、きつねの目にはなんだか平和なあたたかな世界として感じられる。

けれど、表のかん板の上には、たいてい、小さな電灯がともっていましたので、きつねの子は、それを見ながら、ぼうし屋をさがしていきました。自転車のかん板や、めがねのかん板や、そのほかいろんなかん板が、あるものは、新しいペンキでかかれ、あるものは、古いかべのようにはげていましたが、町にはじめて出てきたきつ

よちよち……うまく歩くことができないくて、小さい歩幅でおぼつかない足どりで歩くようす。「よたよた」は進み方が重く鈍い感じを表し、「よちよち」は進行が小刻みで危なっかしい様子をいい、幼児に多く使う

◎母さんぎつねはその姿

◎「きつねの目にはどんなに見えたかな？おそろしいもの？



ねには、それらのものが、いったいなんであるかわからないのでした。

とうとう、ぼうし屋が見つかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大きなシルクハットのぼうしのかん板が、青い電灯にてらされてかかっています。

・やっと見つけたという喜び。それとともに、緊張感もぐっとわき起る。

子ぎつねは、教えられたとおり、トントンと戸をたたきました。

「こんばんは。」

すると、中では何かコトコト音がしていました。やがて、戸が一すんほどゴロリと開いて、光のおびが、道の白い雪の上に長くのびました。

子ぎつねは、その光がまばゆかったので、面くらって、まちがったほうの手を、お母さんが、出しちやいけいと言っけてよく聞かせたほうの手を、すき間からさしこんでしまいました。

「このおててにちようどいい手ぶくろ ください。」

・しまった、と思いつつおそるおそる  
「ください」

・うろたえている感じはしない。まちがいに気がつかないまますなおに語つてみる。

すると、ぼうし屋さんは、おやおやと思われました。きつねの手です。きつねの手が、手ぶくろをくれと言うの

とうとう……ついに。結局。最後に。

面くらう……不意のこととまどう。あわてふためく。驚いてまごつく。

「……まちがいに気づきどきんとした一瞬の間を表現している  
◎「どんなふうと言ったのかな？音読してみよう。」

おや……意外な事に出会った時などに発する声。「――、これは何だろう」  
おやおや……「おや」を強めていう語。失望したりあきれたりする

です。

・「おやおやおかしいものがきたぞ。」とおどろきはあがるが、敵意はあまり感じられない。相手がまだあどけない子ぎつねとわかっているせいだ。

これはきつと、木の葉で買いに来たんだなと思いました。

そこで、

「先にお金をください。」  
と言いました。

・「少しからかってやれ」という気分で相手の出方を楽しもうとしている  
よつ「」も読める。

子ぎつねは、すなおに、にぎってきた白どうかを二つ、  
ぼうし屋さんにわたしました。

ぼうし屋さんは、それを人さし指の先につけて、かち  
合わせてみると、チンチンとよい音がしましたので、こ  
れは木の葉じゃない、ほんとお金だと思いましたので、  
たなから子ども用の毛糸の手ぶくろを取り出してきて、  
子ぎつねの手に持たせてやりました。

・本物のお金とわかると素直に手ぶくろを叩つてる、人のよい善人のぼ  
うし屋。子ぎつねの無邪気なかわいさにひきこまれたとも読める。

子ぎつねは、お礼を言って、また、もと来た道を帰り始  
めました。

場合にも使う。

「お母さんは、人間はおそろしいものだっておっしゃったが、ちっともおそろしくもないや。だって、ぼくの手を見てもどうもしなかったもの。」

・子ぎつねの体験をととしての実感

けれど、子ぎつねは、いったい人間なんてどんなものが、見たいと思いました。

・母さんはおそろしいものと言った。しかし、自分がたったいま触れた人間はちっともおそろしくもない。とてもやさしくて親切だった。母さんから聞いた人間と自分が会った人間は全く違う。その不可解さが、人間への興味を一層膨れあがらせる。自分の目で人間というものはどんなものか確かめてみたい。

あるまどの下を通りかかると、人間の声がしていました。なんとというやさしい、なんとといううつくしい、なんとというおっとりした声なんでしょう。

・漫然と、人間っていいものらしいという意識が、具体的なやさしくて美しくおっとりした声に触れて「ほんとにいいものだなあ」と実感されたい。

「ねむれ ねむれ  
母のむねに、  
ねむれ ねむれ  
母の手に・・・。」

おっとり……こせつかないで、ゆったりしているさま。おおようなさま。

子ぎつねは、その歌声は、きつと、人間のお母さんの声にちがいないと思いました。だって、子ぎつねがねむるときにも、やっぱり母さん子ぎつねは、あんなやさしい声でゆすぶってくれるからです。

・人間の世界にもお母さんや子どもがいるんだなあ、ぼくと同じなんだなあとわかってくる。

すると、今度は、子どもの声がしました。

「母ちゃん、こんなさむい夜は、森の子ぎつねは、さむいさむいって、ないてるでしょうね。」

・自分のことが言われているような気持ちすると母さんの声が、

「森の子ぎつねも、お母さん子ぎつねのお歌を聞いて、ほらあなの中でねむろうとしているでしょうね。」

さあ、ぼうやも早くねんねしなさい。森の子ぎつねとぼうやと、どつちが早くねんねするか、きつと、ぼうやのほうで早くねんねしますよ。」

それを聞くと子ぎつねは、きゆうにお母さんがこいしくなつて、母さん子ぎつねの待っている方へとんでいきました。

・やさしくお母さんに抱かれてねむろうとする人間の子どもに自分を重ねて思い浮かべたとき、こんな家の軒にたえずんでいる自分がさびしくなった。「ぼくもあたたかい母さんの胸にだっこしてもらいたい。」そんな気持ちが高き上げてくる。

母さん子ぎつねは、心配しながら、ぼうやのきつねの帰ってくるのを、今か今かと、ふるえながら待っていましたので、

こいしい……恋する人に逢いたくてじっとしてられない。

今か今かと……物事・状態が、すぐにも現れるかとあせって待つさまにいう。

ふるえる……寒さ・おそれなどで身体が小さきぎみにゆれ動く。

・母さんぎじねは森の出口に立って、子ぎじねが出て行った足跡の残る道の一点を見続けている。いへん待つても子ぎじねは帰ってこない。自分の軽率な判断がとりかえしのつかないことを引き起こしてしまったのではないかとつぶやいていきえが次第にひくんでいく。「もしあの子が帰ってこなかったら」と思うと、もう胸が破れそうな苦しい気持ちになる。

ぼうやが来ると、ぼうやが来ると、あたたかいむねにだきしめてなきたいほどよろこびました。

・もう帰ってこないのかもしれない」と一時は思い詰めていただけに、「ほんとに」の子は私の前にいる」と実感したくてだきしめた。もう二度と自分の手から離すまいという思いもあつたらう。

二ひきのきつねは、森の方へ帰っていきましました。月が出たので、きつねの毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトのかげがたまりました。

・月の輝き、銀色の毛並み、そしてコバルト色の明るい青色。清らかな世界。親子のきつねの純粹な情愛を包み込むよう」

「母ちゃん、人間ってちっともこわかないや。」

・こわくないどころかどうもやさしくていいんだよ、という気持ちをこめて言っている。

「どうして。」

「ぼう、まちがえて、本当のおでて出しちゃったの。でも、ぼうし屋さん、つかまえやしなかったもの。ちゃんと、こないあたたかい手ぶくろくれたもの。」  
「と言つて、手ぶくろのはまった両手を、パンパンやってみせました。」

だきしめる……締めつけるように強くだく。かたく抱いて離さない。  
「我が子を――める」

コバルト……コバルトブルー  
明るい青色

「さあ手ぶくろでしよう。」「と自慢したい気持ち。  
自分でちゃんと買えたんだよという誇らしさ。  
きつねの手に「こんない手ぶくろをくれる人間がおそろしいはずな  
らうよ」と母に教えたい気持ち

母さんぎつねは、

「まあ。」

とあきれましたが、

・なんとという向こう見ずなことをしたのかというおどろき  
・そんなことをしたら捕まえるに決まっているはずの人間が捕まえな  
いどころかちゃんと手ぶくろまで売ってくれたという驚き  
・きつねが全く人間を信じ切っていることへの驚き

「本当に人間は、いいものかしら。」

本当に人間は、いいものかしら。「  
とつぶやきました。

それまでの「人間はおそろしいものだ」という人間観がますます人間  
を信じ切っているきつねの姿を前にして、ゆらぎます。「人間はい  
いものかもしれない」という気持ちが恐ろしさ一辺倒だった母きつ  
ねの心の中にじわわりと広がっていく。

まあ……（女性が）驚いたり感嘆したりした時に発する声。「不思議  
なこと」「きれい」

驚きや意外な気持ちを表す語。「ー、お久しぶり」「ー、そうでした  
か」「ー、失礼ね」

あきれ……意外なことにあって、どうしてよいかわからなくなる。  
途方にくれる。あっけにとられる。

つぶやく……ぶつぶつと小声で言う。くどくどとひとりごとを言う  
小声でひとりごとを言う。